

教育改革への向き合い方

なぜ今、学校現場はこんなにも苦しいのか

OECD の調査で、日本の教員が一番忙しいと明らかになって久しいが、長時間労働は改善しつつも他国と比べるとその比ではなく、英語やプログラミング、ICT の活用など次々に教育改革が降り注いでいます。「結局、国が、文部科学省が悪い」そんな声が聞こえてきますが、「教育をよりよくしたいと考えているのは行政も学校現場も同じ」と元文部科学省キャリア官僚で作家でもある福山市教育委員会の寺田拓真氏は話します。学校現場が負のスパイラルから抜け出すにはどうしたらよいのでしょうか。寺田氏の考えを示します。

「諸悪の根源」のごとく評される文科省。そのことに触れる前に「なぜ今、学校が苦しいのか」について、述べていきます。

まず。これまでの約 20 年にわたり「教育改革」の仕事に取り組み、そして現在も教育行政に携わる者として、確信を持って言えるのは、「今、多くの学校は変わろうとしている」「変わろうと懸命に努力している」ということです。

学校教育に不満を持つ方々からすれば、「遅すぎる」と批判を受けそうですが、考えても見てください。大半の学校の先生にとって、学校というのは、「子どもの頃のすてきな思い出が詰まった場」です。自身が児童や生徒として受けた教育や学校での生活が、つらい思い出ばかりだった人が、はたして「仕事として学校に戻ろう」となるでしょうか。

つまり教師たちにとって、「教育改革」とは、思い出の否定であり、そしてある意味では自分自身の否定でもあるのです。そんな苦しさを抱えながら、それでも多くの教師たちは、自分自身と、そして目の前の子どもたちに向き合い、「よい教育とは何か」を問い続けながら「変わろう」としています。

学校現場に決定的に不足している5つのリソース

しかし、その営みは、残念ながら逆境にあります。教育学者のデビット・コーヘンは、次のように述べています。

「改善の方向性を判断し、それに従って具体の指導を改善するという教師の力量を向上させることなしに、指導法を改善しようとする行政の政策には、ほんのわずかしき期待できないだろう。なぜなら、そのような政策は、教師に必要な『変化（成長）のためのリソース』をほとんど増強しないからである」

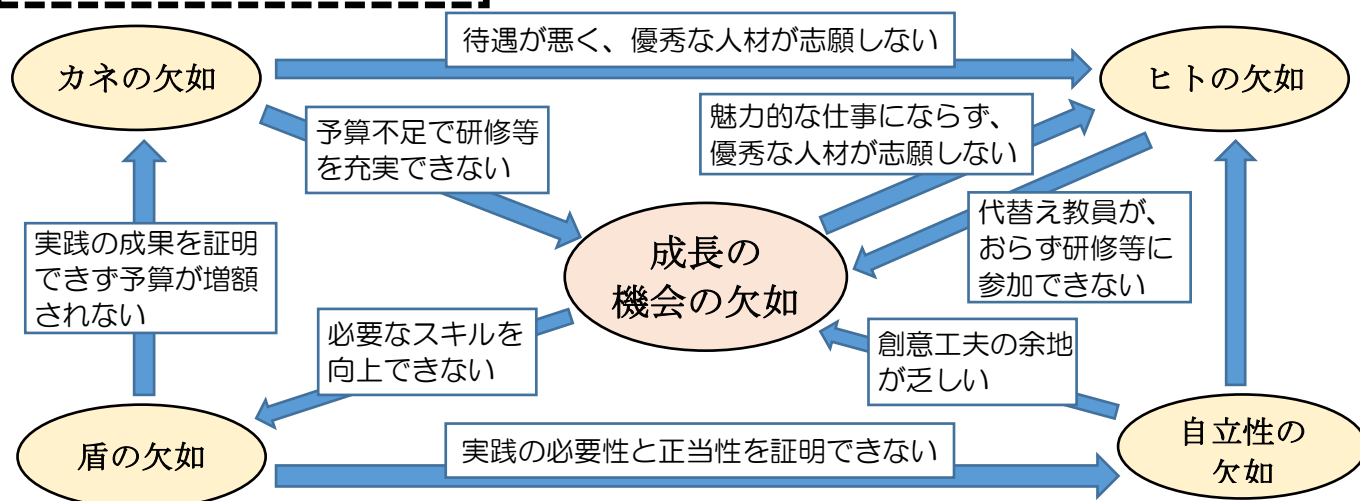
ここに述べられた教師に必要な「変化（成長）のためのリソース」として、私が考えるのは、「（学校の判断で自由に使える）カネ」「ヒト（教師の質と数）」「（外部からの批判や介入から自らを守るための）盾」「自立性（教師の判断で実践を行う自由）」「成長の機会」の5つです。（下図参照）

これら5つのリソースが現在の学校現場には決定的に不足しており、変わろうとする教師の前に立ちふさがるのです。

ここまでで、「やっぱり国が、文科省が悪いんだ」と思われたかもしれません。でもちょっと待ってください。最初に言っておきたいのは、大半の文科省職員は、私利や私欲のために働いてはいません。特に若手の職員は、常に学校現場のことを第一に考えて「何とか先生方の力になりたい」と、懸命に努力を重ねています。ただ、問題は、「システム」です。国の予算は、理屈よりも政治家も交えたパワーゲームの中で決まります。そこでものを言うのは、大義名分やきれいな理論よりも、霞が関の中での「騙し合い・化かし合い」です。



「5つのリソース」の欠如



文科省の職員は、「愚直」とも言えるような、まっすぐなまじめな人が多く、巧みに権力を利用しようとするドラマ「三上先生」（少し前になります）の塚田局長のような人は、むしろ他省庁に多く存在します。ましてや教育施策は、政治家の「票」になりにくく、また、その効果を定量的な数値（エビデンス）で証明することも困難です。

このような逆境の「システム」の中で、政治家や関係団体との関係性を無視し、「教育は未来づくり」とだけ言い続けていても、教育予算は永久に増えません。ですから、政治家や団体の思いや考えも、一定程度くんでいかなければなりません。

教育は、人の数だけ理念があり、団体の数だけ利害があります。結果、推進すべき「〇〇教育」がまた1つ増えたり、大臣が代わるたびに新たな「△△プラン」が出されたりと、現場への要求は増えていきます。つまり、単に学校現場の負担を増やすだけに見えるような施策であっても、現在の「システム」の中で、文科省が、苦しみながらもがいて出した結果であるかもしれないのです。

今後も軸は「主体的・対話的で深い学び」

そのように考えれば、『教育改革流星群』は、今後もやむことはないということが、ご理解いただけると思います。では、それを前提として、学校現場は、どのように立ち向かっていけばよいのでしょうか。

私からの提案は、「しなやかで、したたかな学校現場」になることです。文科省の「改革施策」に、前述のような背景があることを踏まえれば、それらは「きらびやかで新しいもの」であるかのように見せる必要があります。

しかし、他方で、こちらも前述の通り、多くの文科省職員は、学校現場のことを考えています。その結果、新しい施策は、「一見新しそうに見えるが、実は、軸となるこれまでの方向性の範囲内のもの」となります。ですから、「教育改革流星群」が降り注ぐたびに、右往左往したり、辟易したりする必要はありません。現在で言えば、軸となる方向性は、「主体的・対話的で深い学び」です。とにかくこの一点突破で、ここさえ目指していけば、恐れるものはないのです。

最後に現在検討が進められている時期学習指導要領について、「Less is more（少ない方がより豊かである）」の理念に基づき学習内容を構造化し、現場の裁量を高めようとする方向性には、私自身とても期待しています。ただ、1つ加えるならば、指導事項の精選と、標準授業時数の削減に、何とか切り込んでいってほしいと思います。それは単に、「現場が楽をするため」という発想ではありません。先ほど紹介した『5つのリソース』の欠如の図に戻ってください。

この改革の突破口となるのは、中央にある「成長の機会」です。「一点突破すべき」と申しあげた「主体的・対話的で深い学び」を実現するのは、決して簡単なことではありません。現在検討されているよう



な、標準授業時数や単位授業時間の柔軟化は、それはそれで進めてほしいのです。しかしそれだけでは不十分だと思うのです。

中央教育審議会でも、「改革を実現するために必要な教材研究や研修の時間を、学習指導要領の枠組みの中で明示的に保障すべき」と主張されている委員もおられます。

現在の標準授業時数を上限として、その範囲内で、授業時数と教材研究・研修の時間の配分を検討します。そうすれば、教師に、「成長の機会」が保障され、そしてその結果として、より質の高い「主体的・対話的で深い学び」の実現につながると思うのです。

教育行政は文科省だけではありません。教育委員会も教育行政です。「変化（成長）のためのリソース」を1つでも多く教師に届け、「しなやかで、したたかな学校現場」にしていくために、教育委員会の腕が問われています。教育委員会の皆さん頑張りましょう。

広島県総務部局付課長、福山市教育委員会学校教育部参与 寺田拓真氏

東洋経済 education×ICT より

まなび野洲チャレンジ！ 44

今回はこの問題です。正しい答えの番号はどれでしょう。

答えは、最下段に載せています。



《お田植え祭り》

お田植え祭りは、〇〇天皇大嘗祭^{だいじょうさい}に際し、これに供える米を作る田（悠紀斎田）に選ばれたことを記念した祭りです。

昔ながらのすげ笠、緋ばかま、手甲、脚絆姿で数え歌や太鼓に合わせて、踊りと苗植えを奉仕します。

大嘗祭^{にいなめさい}とは、新天皇が即位後、初めて執り行う最も重要で大規模な新嘗祭です。農耕文化に根差し、神々にその年の新穀を捧げ、国家・国民の安寧と五穀豊穡を祈り、天皇自らも食する一台に一度の祭祀です。

さて、〇〇に入る言葉はどれでしょうか。

①明治

②大正

③昭和

④平成

おすすめの図書



『視覚支援を活かした教室環境づくりアイデア集: クラスのみんなが快適に過ごせる』

竹澤萌 著

出版元 中央法規

「先生、次はどうするの?」という迷いを、しくみの力で「自分でできる!」という自信へ――

環境を整えることで、教室のざわつきは穏やかな学びの空間に変わる!! 全学年の担任経験と特別支援学級での経験から生み出された、どの子ども迷わず一歩を踏み出せる教室環境のつくり方を提案

【Canva テンプレート付】

ざわつきを安心に変える「見てわかる」しくみ

教室のざわつきの背景には、子どもたちの困り感や不安があります。本書では、集中を守るために時計を側面の壁に移す、前方の視界を開けて安心感をつくるために教師の事務机を後方に置くなどの物理的なレイアウトからアプローチする方法を紹介。

特性のある子にも「見てわかる」ように視覚情報を整えることで、教室の空気は穏やかになり、子どもたちは学びに向かいやすくなります。